



読書の秋

校長 伊藤 栄司

以前、外国で教員をしている友人から「日本はどうして、何人もノーベル賞を取るような人物を輩出できるのですか?」と聞かれたことがありました。その時は、よく言われるように「勤勉な国民性が理由の一つではないか」と答えたのですが、勤勉な方は日本だけに限らずどの国にも存在するはずなので理由にはならないと思えばらくもやもやしていました。

ところが先日、歴史学者である磯田道史氏の「日本史の内幕」に一つの答えを見つけました。

江戸時代の読書事情

「日本史の内幕」には、『日本の出版文化の充実ぶりは、世界を見渡しても類例がなく、江戸日本は世界一の「書物の国」で硬軟様々な本が流通していた』と書かれています。※

また、江戸や京都、大阪といった大都市だけでなく各藩、各地域の村々にまで書物が行き届いていたそうです。一部の知識階級にだけ読書習慣があった他国とは異なり、老若男女分け隔てなく長い時間、書物に触れる環境にあったことが日本人の基礎教養を築いたと述べられています。

その後、読書の習慣は明治、大正、昭和と受け継がれ幅広い知識や教養をもつ人の中から、専門的な分野に特化した研究によってノーベル賞を取るような人物を輩出できるようになったのではないかと想像を広げました。

子どもたちと読書

本校の図書館では昨年度、のべ12518冊の本が貸し出されました。一人平均では年間36冊になります。また、本校児童はデジタル本「Yomokka! (よもっか!)」を頻繁に読んでおり、紙の本と合わせるとかなりの数になります。一般的には若者の読書離れや活字離れが問題視されていますが、本校の子どもたちは読書に親しむ様子が見えがえします。

親子読書のすすめ

本好きの子どもが育つ環境の一つとして、2名の学校図書館司書が様々な展示・掲示（テーマを決め図書の面出し※や飾りつけを行う環境整備）やイベントを行って児童の興味を引き出し、本の楽しさを児童に伝えています。例えば、イベントでは「おはなし給食」と題し、お話に出てくる食べ物や給食に登場するよう、栄養士と献立を工夫します。また、「読書合戦」では、運動会の赤白チームに分かれて貸し出し数を競う会を企画したりしています。本から得られる知識や体験は無限にあり、子どもたちが今以上に本に浸れるよう工夫しています。

ご家庭では読み聞かせが読書好きの子どもを育てる一番の近道です。また、ある程度自分で読めるようになってきたら、親子で同じ本を読むこともお勧めです。同じ本を読み感想を伝え合うことで同じ文章でも、感じ方や考え方が違い多面的なおもしろさに気付きます。

11月は、ゆっくり落ち着いて本を読むのに適した季節です。より多くの本に親しむことができるよう、ご家庭でも取り組んでみてください。

※「日本史の内幕」磯田道史著・中公新書・2017年

※面出し：机などの平台の上にできるだけ表紙が見えるように本を並べる展示方法